みんぱくリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnol

東北地方タケカゴ細工の基調: 日本列島におけるカゴ細工の諸系列(1)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 俊亀智
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004628

東北地方タケカゴ細工の基調

――日本列島におけるカゴ細工の諸系列(1)――

中村俊亀智*

- I. 問題提起
- Ⅱ. 5つの事例
 - 1. 青森県青森市青柳町
 - 2. 岩手県久慈市山田

- 3. 宮城県玉造郡岩出山町
- 4. 山形県東置賜郡高畠町
- 5. 福島県岩瀬郡岩瀬村矢沢
- Ⅲ. 若干の考察

I. 問題提起

1968年4月から11月までのあいだ、当 時文部省史料館に収められていた旧民族 学博物館所蔵の資料のうち, カゴ・ザル の類(以下これをカゴという)550点余 を調べ整理する機会にめぐまれた。その 結果は図録や研究紀要の形でおおやけに されているが [文部省史料館, 1968: pp. 7-138] [中村, 1969: pp. 283-332], その仕事にしたがっているうち、ふと、 日本各地のカゴの形や手法にはたしかに 全国的に共通するいくつかの型がありう るけれども 「佐藤, 1956], その反面, お おかたのカゴには、そのカゴを生みだし たその地方特有の技術ともいうべきもの がみられ、また、カゴひとつひとつにそ れぞれ持ち味があることに気づかされた。

たとえば東北地方で採集されたカゴに ついていえば、青森から岩手にかけてみ られる独得のツヤをもつ皮ダケでつくら れたビクや六つ目のカゴ、リンゴを取入 れるときのテカゴ、台所でつかう各種の ザル,昔つかわれていた売うみのときのオボキ、山形の南のほうで採集されたハケゴというアジロ編の細い皮ダケのカゴ、またタケ以外を材料にしたカゴでは秋田のイタヤカツコベ、青森の日本海側や秋田、山形にかけておこなわれているアケビカゴ、そのほか宮城の西にのこっている箕の技術を利用した苗とりカゴ等々、それぞれ南のマダケやモウソウダケの地帯のカゴ細工にはみられない技法や持ち味がみられるように思われた[文部省史料館、1968: p. 36, 80, 88, 96, 98, 102, 104, 106, 118, 120, 130, 136, 178] [中村、1969: pp. 321-324] [中村、1974: pp. 176-180]。

もし、こうした印象がわたしだけのものでないとすれば、ひとつひとつのカゴにあらわれる各地方地方の持ち味は、またそれを可能にしている技法や意匠は、どのようなものに支えられているのであろうか。すくなくとも、どのような条件のもとではぐくまれたのだろうか。この小文はそうした問題へのいとぐちをひら

^{*} 国立民族学博物館第 4 研究部

くために東北地方のタケカゴ細工を主題 にして、そうした点を追ってみたもので ある。

そのため小文ではわたしが訪れること ができた東北各地のカゴ細工の生産地の なかから, ごく最近直接当ってみること ができた4地域の事例に、1947年にいっ てみた岩出山町の例を加え, それぞれ, カゴをつくるための,

- a. 材料はどのように整えられてきた か
- b. カゴはどのようにつくられたか
- c. どのようなカゴがつくられてきた か

を中心に,確認できたことがらを報告し, それをもとにして気づいた点を指摘して みたいと思う。

この小文をまとめるため、 図録 [文部 省史料館, 1968] から東北地方のカゴに ついての記載をえらびだし、そのうち特 徴的なカゴの記事を手掛にして, その所 用地をたしかめ、いまそのカゴをつくっ ているところ、または最近までつくって いたひとをたずね, 実際にカゴの生産に たずさわられた方々から上記の3点を中 心にお話をうかがい,その結果を聞書き の形でまとめ、聞書きを引くようにして 報告の部分をまとめてみた。本来ならき きとりに同席してくださった方々を含め、 それぞれの引用ごとにお名前を明らかに すべきであるが、いろいろ考えたすえ、 ここでは特別の場合以外本文のなかでは 個人の名前はださないことにした。聞書 きをつくる過程での書きちがいや思いち がいがあったときには、すみやかに訂正 させていただきたいと思う。なお、個人 の名前には, 学術的な論文ではいっさい 敬称をはぶく約束がおこなわれているが, 小文の性質上ここではさんずけをさせて いただいた。

この小文では技法についてのききとり を聞書きから引用するだけでなく、家で つかっている手元のカゴを調べ、その結 果をつきあわせ、ききとりをおぎなうこ とにした。カゴの作り方や編み方につい ての術語は、必ずしも一定していないが, ここでは、カゴをつくる過程については 底編, 胴編, 縁, それに底から胴にうつ る途中の過程である腰立の4語、タケづ くりの過程ではタケ割とタケ剝ぎ、表皮 のついたタケを皮ダケ、表皮のつかない 維管束や基本組織の部分のタケを身ダケ, カゴの編み方についての用語としては, 四つ目編、六つ目編、アジロ編、笊首編、 四つ目つぶし、六つ目つぶし、縁の仕上 げについては、巻ダケをつかって縁をか がる巻口仕上げ, 野田口仕上げ, 蛇腹巻, 縁ダケや巻ダケをつかわずに縁をまとめ る共縁、六つ目や笊目編で水平方向にい れてあるタケを廻しダケ、タテ方向のタ ケをタチダケ(立竹),補強のためにい れる力ダケを力骨、アジロの編み方をあ らわすためには「2つとび2つくぐり」 「3つとび3つくぐり」などの用語だけ をつかうことにした。

地元での呼び方は慣例的に片仮名であ らわし、聞書きからの引用には、この小 文では*をつけて拠りどころをあきらか にした。

II. 5つの事例

- 1. 青森県青森市青柳町
- a. 材料はどのようにして整えたか 青森の市街のやや東寄りのところに堤 川が流れている。堤川には石森橋そのほ か5つの大きな橋がかかっているが、そ

のうち川口から2番目の青柳橋につうじる大通に面して奈良岡さんの竹細工の製造と卸しの店がある。そこから堤川の川口の青森漁港までは距離にして1,000mほどである。奈良岡さんの店では他県から「約40年ぐらいまえからカラタケ(マダケのこと)をいれてカラタケ細工のカゴも製造しているが」*,昔はもっぱらネマガリダケをつかってカゴをつくっていたという。

材料のネマガリダケは「孫ぢいさんの 時代には」市内から直線距離にして20km 南にくだった「いまはスキー場で、昔か らタケノコの産地で有名な八甲田山一帯, 酸ケ湯付近で伐採してきたが、雪がおお く,消えるのがおそいので」*,やがて採 集の場所を津軽半島の青森湾側の蓬田や, さらに奥の青森からも 50 km はなれた 四ツ滝山の東北地帯、東津軽郡二股、増 川, 三厩方面にうつし, 国有林のネマガ リダケの払下をうけ、「伐採したものを 船で青森港までおくっていたが、この10 年,営林署が薬剤を撒布したことやタケ にハナがついて全滅してしまったので, いまは北海道のネマガリダケをいれてい る」*という。

カゴの材料としてのネマガリダケは「3年から5年目のものがよく、3年のもので根本の太さは20から25mm前後になる。それを鉈で切り、細かい枝をその場ではらい、長さ182cmから212cmに切りそろえ、50本ひとタバにして、1t車か2t車のはいる道路まで」たとえば「1,000mほどワイヤーを張り、切ったタケの束を鉤でつるし、または材木を搬出するときのように山の斜面を流し(シュラ出しし)」*おろす。それも「いまから13年ぐらいまえまでは2束から3束

ずつ背中に背負って運び出した」*ものださにいう。昔は「車のかわりに荷馬車や鼠離がつかわれたが、奥山では馬橇のはいれる道路をつけるためにおおぜいの人夫をやとって山を切りひらく作業からはじめなければならなかった」*。二百十日以降に切ったタケは翌年の5月まで(山の雪がとける時期まで)もつといい、例年この時期に1,200束から1,300束用意された」*。馬橇1台には70束から80束つめるので15台以上のネマガリダケが用意されたことになろう。

陸路や海路を運ばれたタケは「節がつ いたままなので片刃の鉈で節をおとし、 4つから8つに割り、細工するカゴにあ わせて長さや厚さや幅をそろえてからつ かった」*。皮ダケをつくる場合には、4 つ割したタケを、センとセンの台とを組 合せた道具をつかって身のほうをきれい に 剝ぎおとす。「小学校をでるとすぐカ ゴ細工を習いはじめた。孫ぢいさんがカ ゴ屋でその弟子が3人いたが、そのうち の1人のところへ弟子入りした」*。弟子 入りして「最初はタケの作り方からやら される。ネマガリダケは天日にだしてお くと身がしまって(乾いて)なかなか割れ にくくなる。はじめはタケの端などを4 つ割させて鉈のつかい方を練習させ、4 つに割れるようになると、今度は長いタ ケをあずけてタケを割るとき鉈をおこせ ばいいか, あげればいいかなどをのみこ ませる。ネマガリダケにはまんなかに目 がとおっているので、その目をたどって 割らないとたちまちソゲてしまう」*。だ いたい「ネマガリダケはその名のように 根元でもまんなかでも反っているのでカ ラタケのように唐竹割にはできない特色 がある |*。「それらをすべてのみこんで鉈 をとりもてるようになれば1人前」*なのである。タケ作りの練習のあいだに「ザルやテカゴにつかう皮ダケつくりをさせられたりする」*。深雪と北からふきつける強い風のもとで育ったネマガリダケには、シノダケやマダケとはちがったかたさがあり、それを逆に利用してゆければネマガリダケ細工の専門家なのである。

b. カゴはどのようにしてつくられた か

青森では笊目編のカゴもつくられたが, むしろ六つ目のカゴがネマガリダケ細工 の 特徴をよくあらわしている。「県外で は、タケがやわいので、タケを数本いっ しょにして六つ目を編むが、ここではタ チダケも廻しダケも1本だけで編んでゆ く」*。弟子入りしてタケ作りをおぼえる と、つぎにタケの組み方をおぼえる。「カ ゴの底の目にどうタケを差しこんだらよ いか。カゴの帯(廻しダケ)をどうまわ したらよいか。底がどのくらいのひろさ なら、口はどのくらいにひろがるか。ど の程度に曲げればよいか」*。ネマガリダ ケは身がしまっているので、腰立のまが りなど、曲り目を薄くけずり火にあぶっ てまげるという。

縁まで編んだタチダケは、縁のところでねじり、両側からタテ2つに割った丸ダケをそえ、そのうえから皮ダケを巻いてとめるという。「縁まきにはネマガリダケのまだ皮をかぶった1年半の若いシンコを4つ割にしたものをつかう」*。いまでは巻きダケのかわりに針金がつかわれている。いま台所で野菜を洗ったあと水を切るのにつかうザル(六つ目カゴ)についてみる。口の直径 30.5 cm 高さ6cm 重さ130 g で巾 4 mm から7 mm

の皮ダケをつかい,皮の側を外側にして編んである。編み方は底も胴も 15 mm ほどの大きさの六つ目で,タケのそこととにはネマガリダケ特有の黒いシブがのこっている。六つ目の編み目のうえには水の字の形に力骨がいれてあり,編み目を強化している。カ骨は底まわりの2つの目にはめこみ,そのあきまわりのもった縁にはいっている。タチダケは縁のうえ 20 mm のところで切りそろえ,折りまげられ,それをおおうようにしている。タケを2つに割った縁ダケをあて,針金でかがっておさえている。

c. どのようなカゴがつくられたか

港が近いため、 ここでは 魚をはこぶ カゴが主としてつくられている。49年 度の統計によれば海面漁業漁獲量は 12,658,000 kg といわれ, なかでもホタ テやイカの水揚量が群をぬいていること がわかる。陸奥湾と津軽半島の両側には 3つの大きな漁場があるが青森漁港はこ の3つの漁場と結びついている。「春の マスの時期がおわると5月から6月にか けてニシン漁が行われる。昔はニシンは ひと カゴいくらで 売 買 されたものであ る」*。「夏場からアブラツコのカゴをつ くり、そのあいだにツブのカゴにかかる。 底が 24.2 cm で高さが 18.1 cm, 口が 21.2 cm の底が四角で口がまるいカゴで ある」*。 「春と秋には イワシのカゴでお われる。秋にはイワシのテカゴがさかん にでる。頭をとったイワシをテカゴにい れ、水洗し、スダレにのせてさらし、長 いタケの串にさして焼き、ニボシのザル にいれてつるしておく」*。ここでは1年

中,季節の漁業におうじて各種のカゴが 大量に、ひっきりなしにつくられた。タ ラカゴは「水揚げしたタラを運搬するカ ゴで目の大きさが 3 cm ほどの六つ目の カゴで皮ダケだけで編む。つかい方によ って2年から3年もつが、昔はタチダケ を折りまげ、そのうえを荒縄でかがった だけだった。10枚1組にして問屋に卸し た」*。タラの豊漁の時期には「朝3時か ら夜の10時まで働き(夜があけたら仕事 していた), タラのカゴを1日12個から 13個つくった。魚がとれてとれて、仕事 に追いまわされっぱなしだった」*。ハエ ナワザル(延縄笊)には「漁師の舟の大き さや魚の大きさによって 48.5 cm, 51.5 cm, 54.5 cm, 60.6 cm, 63.6 cm などの 種類がある。はじめの2つはカレイ、ス スキ, タイなど。54.5 cm は日本海でと れるマス, 60.6 cm は北海道のタラ漁用 である」*。編み方は 30 mm から 35 mm の大きさの六つ目編で, 60.6 cm から 69.7 cm の長さの皮ダケがつかわれる。 「縁ダケには丸ダケがいれてあり、その 両端をつぎあわせるため, 両端をそぎ, ブドーの 皮で 合せ 目を 結んでとめてい た」*。大量につくられるものなので、底 を編むときに鉄板の型をつくっておき, それを当てて編む工夫もなされたという。 また、8本のボートーで底をおさえて編 む新しい道具なども奈良岡さんのところ で考案してつかった。アブラッコカゴは 「湾内のアブラメをとるカゴで、直径 45.4 cm 高さ60.6cm の円筒形のカゴで, 目にコールタを塗り、海に沈めておく。 いまは沈みがはやいので鉄でつくったカ ゴが一般につかわれている」*。

農業用のカゴでは田植のときの苗いれ カゴ,ショイカゴ,リンゴをいれるテカ

ゴなどがつくられた。「ナエカゴは 21.2 cm に 9.1 cm 高さ 21.2 cm の底が四角 で口が楕円形の六つ目カゴで,苗をいれ 腰につけるカゴ」*。ショイカゴは野菜な どを市内にはこぶ「御用カゴの大きさの カゴで, 在のひとたちが野菜をいれて町 へ売りにくるときなどにつかっていた。 同じショイカゴでも南部のショイカゴは 壺形(ビク型)だが、青森では 57.6 cm に 36.4 cm 高さ 24.2 cm の四角なカゴ がつかわれた」*。ショイカゴは「アミア ゲといって目があいていない編み方(笊 目編)をした」*。リンゴのテカゴは昔つ かわれた木のリンゴ箱に「2つならべて はいるよう 楕 円 体 につくられていて, 33.3 cm に 18.2 cm 高さ 24.2 cm で, 縁にはネマガリダケのシンコをまいたが, いまはビニールテープを巻くようになっ ている」*。

家庭用のカゴではワンカゴとザルがある。ワンカゴは台がつくりつけになった六つ目のカゴで「家族の数によって大きさがちがい,5人家族用で 直径 34 cm 高さ 16 cm」*, ザルは 野菜の 水切りなどにつかう六つ目のカゴで底の各辺に7マス六つ目がはいるから42本で編むという。212.1 cm の長さのネマガリダケを4つ割にしたものでタチダケが12本とれるので,都合縁巻きのタケもいれて5本のタケでこしらえた。

2. 岩手県久慈市山田

a. 材料はどのようにして整えたか

久慈市山田は陸中海岸の要港久慈の市街から直線距離にして南に 7 km ほどさがったところにある戸数20ほどのムラである。 久慈の南には 200 m 前後の丘陵のある岬がつきでているが、山田はその

丘陵の南斜面に位置している。丘陵の斜 面にはいくつかの小さい沢があり、沢の 両側のヒダにはシノダケという指くらい の太さのタケが密生している。その有様 は「雀も群れないくらいタケがぎっしり と天然に生えている」*。山田のカゴ細工 はこのシノダケを材料にしておこなわれ る。

カゴの材料に手頃なタケは太さ 7mm 前後のもので「3年目ぐらいのものがち ょうどよい」*。そのくらいのタケを家か ら行きやすい遠さの場所にみつけ、まと めて採集しておき、家の納屋などにしま っておく。タケ切りの場所は「普段から みておいてよい場所をみつけておく」*。 たいてい「距離にして家から 1km ぐら い離れたところ」で「シノダケがしげる 場所は足場がわるいところがおおいが、 そこへいって鎌で刈ってくる。セイはた かいので 182 cm くらいある。切ったタ ケは500本ぐらいひとまとめにたばね, 長さ3ヒロ半のマダやフジの皮でこしら えたミツグリ (三つ組) のニンナワ (荷 縄)で背中当につけて家まで背負ってく る」。* 500 本のタケを切るのに 約2時間 かかるという。タケは「寒切でないとだ めで、10月の末が刈りどきだ」*。「切っ たタケは2つ割にして半乾燥の状態で束 ねてとっておき、細工をするときには2 晩ほど川のなかにひたし、もどしてから つかう」*。

カゴを編むときには, 水にひたしてお いたタケを水からあげ、鉈で2つに割り (結局1本のタケを4つ割することにな る), 上等なカゴをつくるときには細か く割ったタケのカドを鉈でそぎおとし、 巾 3 mm 前後にそろえ, 鉈で皮の内側 の身のところをほとんどおとし, 皮ダケ にしてつかう。身をおとすとき, タケの 切口に鉈でキズをいれ、30 cm から 40 cm ぐらいまで皮のついているほうの端 を前歯でおさえ、タケの弾力性を利用し ながら鉈で身と皮とを分けてゆく。

b. カゴはどのようにつくられるか

久慈ではカゴのタチダケにも廻しダケ にも同じ巾で同じ厚さのシノダケがつか われる。5.41 はいるフクベをつくるに は、タチダケに長さ 106 cm, 廻しダケ にはそれよりずっと長いタケを用意する。 タチダケのなかから3本ずついっしょに して数条平行にならべ、それらに直交す るように1本ずつ笊目にタチダケを組み 合わせ底編をこしらえる。片ヒザをたて てすわり、足で編目をおさえながら。

胴を編むときには、廻しダケがタチダ ケにしっかりとはめこまれるよう, 針や 爪でタケを押しながら目をつめてゆく。 途中, 胴の編が三分通りできあがると, タチダケの先端を紐で束ね,廻しダケを いれてゆく。形がとりやすいようにして 編むわけである。こうしてカゴの肩の部 分がこしらえられる。みていると、シノ ダケはしなやかで、どんな細工でも自由 にできそうな 感じがする。「胴の高さは カゴの 大きさに 見 合うように 目分量で きめる」*。「底の寸法も目分量できめて ゆく 1*。

廻しダケが縁のところまでかけおわる と、タチダケのさきを鋏で切りそろえ、 1筋が3本で構成されているタチダケの…… 3本のうち右側の1本は右へ,のこりの 2本は左にたおし、それぞれ、右倒しの タケと左倒しのタケとをからみあわせ、 そのうえに巻きダケをまいてゆく。これ をシタマキといっている。そして、その

外側に、直径 10 mm ぐらいの太さの「マタタビの枝をまるくしておいたものをはめ、シタマキとマタタビとをいっタビとをきがケで巻いてとめる」。*マタタビの両端は「鉈でななめにそぎおとし、両端をかさねあわせ、タケで巻いたるととをには、カゴをがかけらは、カゴをがかかわれる。ニガダケが、の風除や壁の下地にものわれる」*。久慈市の小久慈では、久慈市の小久慈では、カゴを編をからにある陸中夏井付近からニガダケを切ってきて、ニガダケだけでカゴを編む。

手元にある小さいフクベについて以上 の点をあたってみると、 このフクベは口 は長径 17 cm 短径 16 cm,底のョコ 17 cm 奥行 14 cm, 高さ 20 cm, 重さ 160 g, ふくらみの部分で計るとタテ(高 さ) ヨコほぼ等しいことがわかる。タチ ダケには幅 3 mm の皮ダケ, 廻しダケ にはそれよりやや巾のひろい 4 mm の 皮ダケがつかわれている。2つのタケと も皮のほうがカゴの外側にむくようにし て編んである。底は3本のタケをいっし ょにしたもの7筋へ、1本ずつのョコの タケ(胴ではタチダケ)をいれ、1筋お きにくぐらせ、笊目編にしている。底が 編みおわると1本のタケはフクベの両側 面で3本いっしょにまとめ、前後の面と 同じように笊目編にしてゆく。底から胴 への移りゆきはかなり急にかわっている。 縁は高さ 10 mm 巾 20 mm で、1 筋の タチダケ3本のうち右1本は右側に左2 本は左側に折りまげ、それらをはさむよ うにして太さ 8 mm の枝がヨコに2重 にまわしてあり、そのうえから巾 4 mm

の皮ダケが巻いてある。縁の断面は楕円 形である。縁も胴も底もタケにはつやが あり、形は全体として落着いた味わいを もっている。

久慈山田では「自家用のカゴなら習っ て1年もあればできるようになる。2年 もやればいくらか売るのにいいカゴがで きるようになる かもしれません」* とい う。久慈の市街には月の3の日と8の日 に果物や野菜などの市がたつ。シノダケ のカゴも市へいって売ってくるという。 市は山田から4km 南へくだった九戸郡 野田町でも16の日にひらかれる。山田で は、カゴ細工は「タケをこしらえること」、 シノダケを割って身をおとし1 本1本タ ケを そろえる ことから 習い はじめる。 「タケがそろわなければいい カゴ はでき ない」*。 それから 組 むのを おぼえる。 「昔と今とをくらべてみると、このあた りでは、かえって今のほうがカゴ細工が 上手になってきている。他県のカゴがは いってくるようになり、それに対抗する ためにはどうしてもいいカゴをつくらね ばならないから、形のとりかたなどは進 んだ。昔はいくらか粗末なものでも売れ たが、いまはていねいなものでないと売 れない」*という。ここでいう他県のカゴ とはカラタケ (マダケ) のカゴをさす。 「カラタケは 唐竹のことで 唐からはいっ てきた タケという 意 味 ではないだろう か」*。「カラタケは身のほうもつかうの で、この土地では皮のついたタケだけで つくるカゴのほうが、 つかいなれている せいか好かれている」*という。

c. どのようなカゴがつくられたか

久慈山田で昔から「主につくったのは フクベ, ザル, テカゴ, ハエナワ(延縄)

のカゴ, ミザル (箕笊), 野菜や魚を背 負ってはこぶのにつか うョコダという カゴなどだった」*。フクベは豆を植える ときの豆いれ、秋キノコをとりにゆくと きやクリひろい、それに魚をいれるビク にもつかった。「型はほとんど 同じで、 大きさによって、36 l, 10.8 l, 9 l, 5.4 l などの種類がある。361いりのフクベは 背負えるようになっているのでショイフ クベという。そのほかのフクベはフクベ の首に紐をつけて腰にさげてあるく」*。 現在のフクベは首が省略されていて肩か らすぐ口になるが、昔のものには首がつ いていた [文部省史料館, 1968: p. 105]。 「5.41 フクベなら夜業して1日に4つこ しらえた。タケを割るのに1時間、組む のに2時間かかった」*。「小さいフクベ は大きいフクベよりも, かえって手間が かかるので、できあがるまでの時間はフ クベの大きい小さいによって、それほど かわらなかった」*。

久慈山田は「30年前まではほとんどの家が炭焼を専業といっていいくらいにやっていた。炭焼だけを専業にやっていたひとも20軒のなかで20人いたこともある」*。カゴ細工は「冬に外へでられないときの冬仕事に」数人のひとたちがやっていた。カゴ細工は農閑期の副業のひとつだったという。

3. 宮城県玉造郡岩出山町

a. 材料はどのようにして整えたか

東北地方には、昔から、シノダケやそのほかの細いタケをつかって家庭の台所でつかうカゴやザルを集中的に生産している産地がいくつかある。宮城県の岩出山町や築館町もそのひとつである。岩出山町は、仙北平野の西よりに位置する羽

後街道にそう人口17,580の古い時代の城 下町で、タケ細工は現在でもここの名産 の筆頭にあげられている。

岩出山では材料はシノダケ,またはスズダケで,「山の沢や,平地では川の縁などに密生している」*という。たいてい「家から 4 km ほどいった標高 100 m ぐらいのところにはえている。それをキノコ採りにつかう小さな鎌で1本1本目元から切ってくる」*。スズダケは 長さ 2.5 m 太さは 7 mm から 10 mm のこく細い タケだという。「切ったタケはその場で 67 cm から 100 cm の長さに切りそろえ,フジの皮で束ね,家まで背ってくる」*。背中にはカタアテというワラ細工の背や当をきていった。

家に運びこんだタケは「片刃の鉈で4つに割り、それをさらに2つに割り、巾5mm ほどにしてつかう」*。カラタケなら両刃の鉈をつかうのだがシノダケではその点が異なるという。そして、身のところは全部そぎおとし、皮ダケの形にこしらえてつかう。岩出山でもタチダケにも廻しダケにも同じ巾で同じ厚さのタケがつかわれている。

b. カゴはどのようにしてつくられた か

岩出山でつくられるカゴは、ほとんど、 笊目編と六つ目編のカゴである。ザルを 編むときには、整えた皮ダケを2本ずつ いっしょにして編んでゆく。「底はアジロで、このアジロの部分をとくにマスという」。カゴの大きさによって、8本組のマス、10本組のマス、10本組のマスがある。8本のものをヤタテ、10本のものならトダテという。「底のマスから胴までは、廻しダケが7廻りするの でナナマワリといっている。ナナマワリ のつくり具合でカゴ全体の形が決まって しまう。ナナマワリは胴の編み方にくら べて幾分やわらかめに編む」*。

ここではカゴを編む勘どころはどこに あったのだろうか。「昔は、1人前にな るまで3年以上かかるといわれたものだ。 実際にはそれでもカゴ細工をおぼえてむ のは難しかった。はじめタケ割からはじ め,底を組む作業,そして最後にナナマ ワシや縁の編み方をおそわった」*。「胴 の編も縁も、きっちりと目がしまってい ないといけない」*のでそう編むのがとく に難しかった。また、縁の作り方も岩出 山独自のものである。「タチダケは、 縁 のところで、カキオリといってタケ同志 を折りまげ、そのうえからワダケという 縁のタケを2本重ねていれ、そのうえを 細い身ダケで巻いて仕上げる」*。縁ダケ のワダケは必ずしも上下2本が同じ太さ だとはかぎらないので、縁の幅をそろえ るため、タケのアイダにヘギをいれて形 をそろえるという。岩出山のカゴ細工で は「とくに縁の編み方が, いちばん難し かった。縁の上手な人が、とりもなおさ ず、 細工の 上手 な 人だといってよかっ た1*。

以上の点を手元の口径 32 cm 高さ 21 cm 底径 19 cm 重さ 260 g のザルについてみると、つぎのようである。このザルは深さがかなり深いが、それが岩出山のザルの特徴でもあるという。タチダケも廻しダケも 4 mm ないし 5 mm の皮ダケで、皮のほうをカゴの内側にして編んである。底のまんなかのマスの部分の1辺は8 cm で、2つとび2つくぐりのアジロがみられる。マスをはずれると、タチダケは七廻しの過程で1本ずつにわ

けられ、そのまま縁のところまでのぼり つめてゆく。 マスから 胴の 高さの ほぼ 2/3 のところまでは、 廻しダケでタチダ ケをかがるとき1段でとに1本ずつへら してゆく「ななめアジロ」とか綾編とか いう編み方(?)がつかわれ、のこりの 1/3 のところは 普通の笊目編の手法がつ かわれている。家庭でつかうカゴなので 多少ていねいにつくられたかもしれない がマダケのザルなら珍らしい編み方であ る。タチダケは縁から3cm でたところ で先を切り落し、胴のほうへ折りまげ、 胴の廻しダケのあいだにはさんでとめる。 問題の縁には、太さ 3 mm と 7 mm の 丸ダケがワダケとしていれてある。しか もその下の外側に幅 10 mm の身ダケ、 内側には幅 6 mm の身ダケがそえてあ り, そのうえを幅 5 mm の皮ダケで巻 いてとめている。そのため縁の高さは外 側で 25 mm, 厚さは 20 mm にもなる。 そして、縁の外側の面は胴の外側の面よ りも 7 mm も張りだす結果になってい る。これに対して縁の内側の面はスムー ズに胴の内側の面へとつづいている。上 からカゴの内側をのぞくと、タケの黒味 がかったところがそのままのこされてい て、それがかえってひなびた味わいを与 えてくれる。このザルには幅 15 mm の マダケの皮ダケで十の字の形に力骨がい れられている。

c. どのようなカゴがつくられたか

岩出山では、カラタケで「ウマやウシにかいばをやる(かいばを運ぶのにつかう)カマザルのような」*, 直径 58 cm 高さ 44 cm 重さ 2.2 kg で、縁に幅 30 mm の巾のひろい皮ダケをいれ、力骨を 4 本もつかうような笊目編の大きなカゴ

もつくられる。しかし、たいていはお茶 をいれる深いザルや台所で野菜や食器の 水きりをするのにつかう浅いザルや六つ 目のカゴ、味噌こしザル、魚のビクなど のような小さなカゴがつくられ、各地に 出荷されている。

岩出山では毎年カゴ細工をするひとた ちの組合が主催して講習会が開かれ、副 業としてのカゴ細工も定着しているよう にみえるが、しかし、「昔はそのひとひ とによって自分は浅いカゴをつくる。自 分は深いザルをつくるというように、そ れぞれ得意なカゴ細工をもつ傾向がつよ かった。アジロを編むひとはアジロだけ を, カゴをつくるひとはザルはつくらな いで、専門にカゴだけ編んでいた。たい ていそのひとが最初に習いおぼえたカゴ が、その後もそのひとの専門になった」* といわれている。何故そうなったのか。 「たくさんつくるには、 そのほうが やり やすかったから」*という答がもどってき た。岩出山では安定した需要を前提にし て、カゴ細工が専門分化する傾向がはや くからはじまっていたわけである。

4. 山形県東置賜郡高畠町

a. 材料はどのように整えていたか

高畠町は米沢盆地の東はずれにある人 口27,500, 広さ 181.2 km² の町である。 町の59%は山林で、聚落のまわりには 600 m ほどの丘陵があり、県界の二井宿 峠を東にこえると七ケ宿町や白石市に出 られる道路がひらけている。高畠は民芸 のひとたちによって, はやくから, 雪帽 子やその他のワラ細工, そして, タケタ ガラという背負カゴをうみだしたところ として注目されている「伊東, 1965: p. 31]_o

高畠では、材料のタケを地元からとら ずに、昔から宮城県柴田郡村田町足立や 峠をこえた白石方面から買いいれていた という。タケの産地では蔵王山麓東側の シノダケを「副業にタケキリするひとた ちがあり、 切った タケを 四つに 割り、 121.2 cm の長さに切り、120本を1护 にまとめ、182 cm の長さのものなら90 本, 91 cm のものなら150本1把の割 で」*、ちゃんと所定の長さに整えてくれ て駅留などで送ってよこした。高畠では カゴの「春からの売れゆきをみてタケを 仕入れた」*。「タケづくりには、村の年 寄のひとたちがゆき、鉈で切り口に割り をいれ皮のほうを口にくわえて鉈でこう して剝いでいた」*。おそらくそれは岩手 県久慈市山田でわたしたちがみたものと 同じ作業がなされていたにちがいない。 「カゴの 材料にするタケは、 タケの皮の ところだけ(皮ダケ)で、身のほうはド ジョウド(筌)などにつかい、宮城のほ うからよく売りにきていた」*。

b. カゴはどのようにつくられたか

高畠のタケ細工をする家では、仕入れ たタケを束ねたまま作業場の壁などにた てかけておき、編むまえに1晩水にうる かしてから水を切り、タケがまだしなや かなうちにつかう。

ハケゴというアジロのカゴでは,シノ ダケを2本ずついっしょにして3つとび 3つくぐりのやり方でアジロに編み、ま ず底をこしらえる。そのとき、編みの面 ができるだけたいらになるよう, タケを 2本ずつあわせるとき、2本のタケの向 きをかえ, モトとウラがそれぞれいっし ょになるように組合せる。また、物差な どで目を押して詰めながら編んでいる。

タテ・ヨコの寸法などは目分量で「ハケゴは高さもヨコ巾も同じくらいの寸法につくる」*。そして、タケを13筋ずつ組合せ、底のまんなかの中心の部分を編みすわり、さらにそこから外側へと編みすすんでゆくとき、タケを何回とばし、またはくぐらせるかによって2回のぼりとかいい、それによってカゴの大きさを決めてゆく。そういう底編の作業がいちばん手間がかかるという。

胴を編みおわると、 タケを 縁から 10 cm ぐらい余裕をのこして鋏で切り、「タ ケの向きなりに手で縁のほうに押えつけ, 箕通で巻ダケをさして巻いてゆく」*。そ うすると口は内側にすぼまるが、「ハケ ゴは腰につけるので、口が内側にすぼま っていると、腰をまげてもなかのものが とぼれ落ちない」という。ハケゴは底す ばみで口が開いた形をしているが、その 形がなかなかとりにくく「この形のとり かたが難しい, 口はすぼめすぎてもだめ, 広げすぎても形がまとまらない」*という。 実例にあたってみると、手元にあるハケ ゴの底のヨコ幅は 26 cm 奥行 10 cm 高 さ 29 cm, 口は楕円形で長径 22 cm 短 径 20 cm, 口の内径は16 ないし17 cm, 重さは 390 g で、カゴ全体に 4 ないし 7 mm の巾の皮ダケが皮のほうを外にし てつかわれている。そのタケを2本ずつ いっしょにあわせて3つとび3つくぐり のアジロが胴にも底にもみられる。底は タケ9筋でまんなかのマスの部分を組み、 それから1回タケをとび・くぐりさせ(だ から2回のぼりということになる),底 から胴の編へと移る。胴の前後の面で, 胴は直線的に口までひろがってゆく。縁 まで 編んできたタケは、 縁の線から 10 cm ぐらい上で切りそろえ、縁の線に近

づくまで左へ左へと倒し、そのうえを巾6 mm の皮ダケで巻いて仕上げている。縁は厚さ 13 mm 前後で、カゴの内側へ20 mm 以上も折れかぶさっている。 このような縁ずくりも、アジロ編でタチダケが多いからできることである。この外が多いからできることである。このハケゴでは、前面から後にかけて巾7 mm の皮ダケをいれて一種の力骨のようにしている。縁には紐をとおして腰につけられるようにしてこしらえられている。

シノダケのヘギダケをつかうカゴ細工 の特徴は「タケがやわらかく、同じシノ ダケだけでいろいろなカゴがつくられる ことである。これがカラタケだと,底廻 りと縁どめのタケでは厚さも巾もかえて いかねばならない」*。「だから, シノダ ケのヘギタケ細工は副業のタケ細工には むいていて,なにしろ教わりやすい」*。 また、「タケ細工にはオオザイク(大細工) とコザイク (小細工) との2つの種類が あるが、(小細工は家庭用の台所のザル などのようなカゴをつくる細工、大細工 は農業につかうカゴや蚕具としてのカゴ をつくる細工のことで、その内容は地方 によって 必ずしも 同じではない),シノ のヘギダケをつかった細工はどちらかと いうと小細工むき」*にできているといわ れる。「シノダケのカゴ細工では 目を細 かく編まねばならないので、目の大きさ をそろえて編むのがコッである。たとえ ば、ザルにはコメトギザルとアワトギザ ルとがある。アワトギはコメトギよりも 目が細いので、それに応じて廻しダケの 裂き方もちがってこなければならない。 アワトギのときには、シノダケを四つ割 にしたものを, さらにまんなかからタテ

2つに割る」*。そうすると「タケの断面 が細長い直角三角形状になるが、その鋭 い角の薄いほうの側を常に上にむけるよ うにしてタチダケにかけてゆく」*。こう して上の廻しダケのやや厚い側と、下の タケのやや薄い側とが接しあい、目がつ まって編めるのだという。

c. どのようなカゴがつくられたか

ハケゴには大きいハケゴと小さいハケ ゴとがある。ハケゴを編むタケの長さに よってサンジャクハケゴ, ヨンシャクハ ケゴなどの呼び方がなされている。サン ジャクハケゴはタテョコとも 18 cm, ョ ンシャクハケゴは 32 cm で、山菜とり やキノコ採りなどにもってゆく。「昭和 25年頃、高畠町にはカゴ屋をやっている ひとが5人ないし6人いたが、戦前さか んだった頃には副業のひとまでいれて40 人から50人のひとたちがカゴ細工をして いた。その大部分のひとたちがハケゴを つくり、米沢市や川西町や長井や小国へ 出荷していた」*。その頃には講習会まで 開かれてみなカゴ細工を教わったといわ れている。キノコとりはいまでもさかん で、「9月から10月にかけて、毎日のよ うに誰かが山へ行っている。毎日副業的 にやっているひともあるほどだ」*。しか し「キノコの季節にはハケゴもたくさん 売れるので、カゴ編におわれ、せっかく 地元にいるのに自分ではキノコとりに行 けないくらいだ」*。ハケゴには、このほ か、横にながい雑魚とりのハケゴ、畑の ナスモギのハケゴ,ワラビやゼンマイ・ アケビとりのハケゴなどがあり、編み方 は同じでも、さまざまなハケゴがつくら れている。

高畠でハケゴのほかつくられたものに

養蚕用のカゴとタガラカゴがある。養蚕 関係のカゴでは、マユの運搬カゴ、マユ をいれるマユカゴ,桑つみ用のクワザル などで、カラタケがつかわれた。マユカ ゴは「マユ 15 kg はいるカゴで 男衆が 片方の肩にのせて運べるくらいの大きさ につくられていて、直径は 75.8 cm. 高 さ 60.6 cm で、底はクモの巣編、胴は 笊編, 縁には 12 mm のタケがあててあ り、それを別のタケで巻いてとめていた。 いまから15年前までつかっていたが、マ ユ袋がつかわれだしてつかわなくなっ た」*という。クワザルは直径 48.5 cm 高 さ 30.3 cm のザルだった。

高畠町のもっとも主要な産業は農業で ある。いまでも農業経営にたずさわって いる家は全体の55%にあたるという。最 近ではブドーやリンゴなどの果樹栽培, 酪農、畜産を加え、農業は比較的たかい 生産性をあげているといわれている。他 の東北の稲作地帯と同じように、高畠で も,冬,雪がまだ積っているうちに橇で **堆肥を田に運んでつみあげておく。とこ** ろが「昭和23年から24年にかけて、雪が ほとんど 降らず」「雪が積らないので橇 がつかえず, そのため, タガラといって スギの若木をまげ、それにワラ縄を巻い た背負カゴに堆肥をいれて田まで運ばね ばならなかったことがあった」*。そこで、 高畠で3代前からカゴ屋だった一本柳の 佐藤信之助さんが、昔からつかっていた 「スギのタガラをカラタケでこしらえ, タケのタガラカゴ」を試作したところ, それが好評でひろまったので、そのカゴ が県の農村工業振興展示会で、1948年8 月、山形県知事から優秀作として賞状を うけることになる。このタケタガラの生 まれる背景には東北のタケカゴ細工のも

つひとつの重要な側面がでているので, もうすとし詳しく佐藤さんのカゴ細工に ついてみておきたい。佐藤さんは「父親 も伯父もタケ細工で、父親は仲買や販売 もやりながらシノダケのヘギタケ細工、 伯父さんはカラタケ細工を専門にした」* という。東北もここまでくるとマダケの いわゆるカラタケ細工が浸透してくる。 佐藤さんは伯父さんのところに小学校を 出るとすぐ弟子入りしカラタケ細工を習 うことになる。そして「ネン (年季) が あけると東北から関西まで修業してある いた」*。「主としてカラタケ細工をした が、自然、シノダケのヘギタケ細工もで きたし、養蚕のカゴなどもさかんにこし らえた」*。当時はどの「親方のところで も3日間はだまって食べさせてくれ、そ のあいだにその土地でやっているタケ細 工を懇切に教えてくれた。そのあとは、 親方のところではできないようなカゴ細 工、浜の漁業用の大細工ばかりしかつく らない親方のところでは台所のザルのよ うな小細工をつくって店において売って もらい, 手間をとって, おいてもらった」*。 だから「神戸のカゴ屋にいたときなど, 店頭でザルがいるといえばザルをつくり、 目カゴの注文があれば目かごをつくり, タケサキ(タケ割)が間にあわないときに はタケサキの仕事に廻り, すっかり重宝 されて普通の人の数倍の工賃をもらって 働かせてもらった」*。関西ではカゴ作り も分化していて「親方のところではタテ 110 cm ョコ 40 cm の大きな運送カゴし かつくらなかった」*からである。こうし た経験から佐藤さんは「ザル目でもカゴ 目でも(シノダケのヘギタケ細工でもカ ラタケ細工でも)何でもこなせるのは東 北人だけだ」*と笑いながらいわれる。佐

藤さんは、1950年前後、ビニールのカゴに おされて専門のカゴ作りをよして雑貨屋 をはじめるが、それまでにブドーやリン ゴのカゴなどの新しいカゴを工夫される。 その1例としてリンゴもぎのとき腰につ けてリンゴをいれるカゴを紹介しておき たい。 このリンゴカゴはヨコ 32.5 cm 奥行 28 cm 高さ 33.5 cm 重さ 460 g で, 大きさの割には軽くこしらえられている。 それというのもこのカゴがカラタケを主 とした目カゴだからであろう。全体の形 はやや四角ばった楕円体で、高さがヨコ 巾よりも 10 mm 多いだけなのに、きち っとしまってみえる。このカゴでは底も 胴も大きさ 25 mm の六つ目編で,タチ ダケには巾 9 mm の皮ダケが6本まん なかに、そのまわりに同じ巾の身ダケが つかわれている。ただし、胴のまんなか と底まわりには巾 10 mm の身ダケがい れてある。縁は高さ 25mm 厚さ 10mm で丈夫な皮ダケを内外につかい、そのあ いだに 野田口 仕 上げのように タテョコ 4 mm の皮ダケをいれて透き間をふさぎ, 上から針金を巻いてとめている。そして、 これらに巾 24 mm の厚い皮ダケを2本 平行にそえて力骨にし、この力骨を胴の まんなかのところで、 ョコに巾 10 mm の皮ダケでおさえ、その下にきている巾 10 mm の六つ目の廻しダケのあいだに 力骨をはさむようにして針金でかがって とめている。それが全体の強化にきわめ て有効に作用しているように思われる。

5. 福島県岩瀬郡岩瀬村矢沢

a. 材料はどのように整えたか

奥羽本線を南にくだると, ちょうど山 形と福島との県界をこえ, 福島盆地に おりはじめるあたりから, 村の山ぞいや 家々のうしろにマダケやモウソウのタケ 籔がみられるようになる。そして、いよ いよカラタケ(マダケ)地帯にはいった ことを知らされる。そこではどのような カゴ細工が育ったのだろうか。岩瀬村は 郡山盆地の西側の山ぞいにひろがる人口 6,170, 面積 64.1 km² の村で、東北本 線の須賀川から西約 10 km のところに ある。村の南半分は 300 m 前後の丘陵、 西半分は山地で 1013 m の笠ケ森山に つづいている。村の北東側は滑川ぞいに 水田がひらけている。矢沢の聚落は村の 東のはしにある。

矢沢では材料はほとんどカラタケで, 「10月から11月にかけてが タケ切りの季 節で、この時期に切ったタケは虫がつか ず、1年もつ」*といい「たいてい岩瀬村 内でみつけて切ってきて家の軒廻りなど にかこっておく」*。このあたりはタケ籔 をもっている家がすくなくないので, す こし多めにゆずりうけてきて, よいのを 選んで つかうのだという。「材料として のカラタケは、タケに身がはいり強さの でてくる5年目から6年目のものがよく, 節が低く伸びのあるのを選ぶ」*。「長いの は 15 m もあるので昔は荷車につけて家 まで運んだ」*。タケは「30.3 cm にくる まったものを4把でイチダンというが、 さかんにカゴをつくっていた頃には1年 に30段もつかった」*。ちなみにタケの1 把は、周囲 15.2 cm なら7本、18.2 cm のものなら 5本, 21.2 cm なら 4本, 24.2 cm で 3 本, 27.3 cm で 2 本の割だ

カゴを編むときには「かこっておいた タケをズリ(竹きり鋸)で 3.03 m ぐら いの長さに切り、それを両刃の鉈で4つ に割り、さらに巾 9 mm くらいに小割 にし、皮から身のほうへ8枚に剝いでゆ く」*。カラタケ地帯のタケ細工では、身 も大切な材料になるので,タケがうまく 剝げるかどうか、同じ巾で同じ厚さのタ ケがとれるかどうかによってカゴがうま くつくれるかどうかがきまってくる。こ の材料としてのタケを整えるまでの工程 をタケゴシライといっている。その過程 の詳しくは本格的にマダケのカゴ細工を あつかう次の小文にゆずりたいと思う。 それはそれとして「つかって楽なのはシ ノダケで、カラタケが満足にとれるよう になるにはしばらくかかる」*。 「岩瀬 で シノダケをつかうのはザルだけだが、シ ノダケは付近の山から11月頃にとってき て、すぐ4つ割し、口で皮をくわえなが ら剝ぎをして、鉈で皮ダケと身ダケをわ ける。たいてい11月には1年分つかうタ ケを鎌で切ってきてしまう。それを(2 つとび2つくぐりのアジロに)編み,底 のまんなかを編みおわると七廻りにかか り、腰立に移る」*。シノダケのザルの作 り方はつい確めないでしまった。

b. カゴはどのようにつくられたか

岩瀬のカゴの編み方は主として目の大きなロッカクとよばれる六つ目に笊目間である。岩瀬のあるカゴ屋さんは(16才のとき同じ村の上手な親方のところところりし、5年して徴兵検査までに年季奉公をおえ、鉈、ズリ、セン、花鋏な立年本をおえ、鉈、ブリ、セン、で独立立は上」*。「弟子にはいって、はじめな六でした」*。「弟子にはいって、はじめな六でした」をきには、シノダケでかなれるませした」をもらってなわってなり、タケゴシライを習う。タケゴシライを引っていたがり、これが一番難しい。それからカラタケにうつり、イモカゴの

ような小さいカゴから順に大きいカゴをおぼえてゆく」*。「ロッカク(六つ目)のようなカゴでは、編むときに目に大きいちいさいがないよう、目の大きさがそろうように編む。これもむずかしい」*。

c. どのようなカゴがつくられたか

岩瀬では1年中、「もっぱら村のひと たちが農業につかう, 稲の取入れや養蚕 用のカゴ」がこしらえられていた。カゴ 細工というものには「セツ (季節) があ り、それぞれ時期があり、春はクサカリ のショイカゴやイモカゴ, 夏はキノコと りや魚とりのハケゴ、秋は稲の取入れに つかうカマザル、冬はつぎのとしにつか う養蚕のカゴというふうに、昔はカゴ細 工の仕事が1年中たえまなくあった」*。 岩瀬のカゴ屋はみんな「カゴは昔から同 じ村の需要者のためにつくった」*。1927 年前後, こうした, いわば村のカゴ屋と もいうべきひとたちが「岩瀬郡には40数 人あり竹細工組合をつくり,毎年10月に 寄合 をしてカゴの 値 段 などをきめてい た」*という。このことから、どこの村に も数人のカゴ屋が専門でカゴをつくり、 村のひとたちの需用におうじていた様子 がうかがえる。そうしたカゴの生産のあ りかたはそのまま関東以南にまでつづく わけである。

岩瀬でのショイカゴは 45.5 mm の目の大きい六つ目のカゴで、タチダケは 15 mm、廻しダケには 24 mm の皮タケをつかい「山で草刈をして家まで運んだり、田のアゼの草刈につかわれる」*。イモカゴはジャガイモを収穫したあと洗って土をおとすときのカゴで六つ目で目の大きさは 24 mm、養蚕のときカイコをいれる 15 mm ぐらいの目の六つ目カゴ

がヨーサンカゴ,クワイレハケゴは桑と りのとき肩にさげる笊目編のカゴで底は 四つ目目つぶしに編み、身ダケと皮ダケ を半々につかうという。また、マユカゴ は 9 mm の目の細かい六つ目カゴで巾 15 mm のカラタケを2本ずついっしょ にあわせて編み, そのなかに布の袋をい れてマユをいれたが、須賀川にこのカゴ だけを専門につくるひとがいたので岩瀬 ではあまりつくらなかったようである。 このほか稲の取入れのとき籾や米をいれ a 2.7 l いりのカマザルもつくられたが, これまでのネマガリやシノダケを材料に したタケ細工にくらべ、ここでは全体と して大型の目カゴがつくられていたこと がわかる。

岩瀬の兼子さんは昔はさかんにカゴ細 工をやったが、このところ若いときから のカゴ細工に基礎をおいた工芸的なカゴ を暇をみてこしらえている。46年には県 の老人作品展で知事賞をもらったが、こ こにはその1つをあげておきたい。この カゴは口の直径 11 cm ないし 10.5 cm, 底はョコ 12.5 cm 奥行 11.5 cm, 高さ 17 cm 重さ 130 g で, タチダケには巾 6 mm の皮ダケがつかわれ, この皮ダケ は皮のほうをカゴの内側にむけて組んで ある。底は四つ目で、その目を巾 15mm の皮ダケ4本でつぶしている。潰しダケ のうち2枚はススダケ(煤竹)で、古い 農家のイロリの天井などにつかってスス けた黒いタケを磨いてツヤをだしたもの だという。胴は 1 mm から 2 mm の皮 ダケを廻しダケにいれ、それも胴の下か ら 8 cm のところまでは同じ巾のススダ ケが1本おきにいれてあってカスリ文様 を編みだしている。タケはよく磨いてあ り,カスリにも狂いがない。縁は巻口仕 上げであるが、巾 5 mm くらいの身ダ ケをなかにいれ、そのまわりに巾8mm の身ダケを巻き、その外側に巾 3 mm の縁ダケをいれ、さらにもうひとつ外側 からススダケの身ダケを巻いて仕上げて いる。この縁の作り方は二重巻きといわ れるやり方らしく, 関東地方のカゴ細工 にはめずらしくない手法である。

III. 若干の老察

東北地方には幾種類ものタケがつかわ れている。そのひとつひとつについて学 名などを確めることはできなかったが、 青森には有名な八甲田をはじめネマガリ ダケが県下各地に分布しているし、青森 から岩手・宮城の両県にわたってシノダ ケ(アズマネザサ?)やニガタケがつかわ れ、ことに岩手では書物でみるとアズマ ネザサ, ジョウボウジダケ, ヨナイザサ, クザカイザサ, ハツロウザサ, オオシダ ザサ、ヒメカミザサ、ナンブスズ、スズ ダケといった 名前があがっている [室井, 1969: pp. 96-180]。また福島まで南下 すると、完全にマダケやモウソウの勢力 圏にはいるようである。もし、各地にそ だつこれらのタケがそれぞれその土地の カゴ細工の素材となったとすれば、東北 のタケカゴ細工の基調は、まずその材料 の豊かさという点にもとめることができ よう。実はその点を考慮して小文では青 森のネマガリダケ細工、岩手県久慈市山 田や宮城県岩出山町、それに山形県高畠 町のシノダケのカゴ細工、山形県高畠町 や福島県岩瀬村のカラタケのカゴ細工を とりあげたが、東北のタケカゴ細工の系 列は、おおづかみにみて、青森のネマガ リダケ,岩手・山形・宮城のシノダケ, 福島のカラタケによるカゴ細工といった

数系列にまとめてみることができそうに 思われる。

それならひとつの素材としてのタケは カゴ細工にどのような影響をあたえたの だろうか。ネマガリ,シノ,カラタケを 手にとってくらべてみると素人目にもそ の質のちがいといったものがつたわって くる。まず、皮や身のしまった東北のネ マガリダケのカゴ細工では、タケ自体が かたく、彎曲しているので、それを同じ 巾と同じ厚さの細いテープ状にするまで に、すなわちタケづくりの過程におおく の努力がはらわれていることが事例から もうかがえる。しかし、その結果は巾の せまいタケを1本ずつ組みあわせて(こ れくらいのタケだと2本ないし3本をい っしょに組合せてカゴを編むことを考え るのだが) 六つ目のきれいな目編のカゴ や目のしまった笊目のカゴがつくられる。 同じ山のタケでもシノダケは、その点ず っと楽で、コツをおぼえればタケづくり はたやすくできる(ようにみえ),タケ がやわらかいので、教わればいろいろな カゴ細工になじめそうに思われる。シノ ダケのカゴのよさは、素朴な土のあたた かさをのこし、しかも細いタケのもつキ メのこまかさにあろう。カラタケは、ネ マガリダケやシノダケとちがって,皮ば かりか身ダケを活用する点にひとつの特 色がある。そのためにはタケを剝ぐため の修練が要求されるが、いったんタケヘ ギができるようになるとネマガリやシノ ダケにはみられない, 巾のひろい軽いタ ケをつかって荒い目の丈夫なカゴを生み だすことができよう。カラダケをつかっ た工芸的なカゴには、ネマガリダケやシ ノダケのカゴにはみられないするどさや かたさがみられるようになる。

ここにとりあげた5地域のカゴ細工で とくに注意してよいのは縁づくりである。 一般にタケカゴ細工の体系は昔からマダ ケのカゴ細工に伝えられてきた技法を整 理してたてられているが、東北のここに あげたカゴ細工には教科書にはでてこな い縁づくりがなされている。久慈市のマ タタビをいれる縁のつくりがそうであり, 岩出山の丸ダケを重ねて縁にいれる縁づ くりがそうであり、そういえば高畠の共 縁も、青森のネマガリダケをつかう縁づ くりもやはり特異なものである。こうし た非教科書的な技法をその他の編み方の 技法にもみいだす仕事は,いかにささや かでも、その土地のひとたちのかくれた 努力をあとづけ, カゴ細工の固定的な枠 組をやぶるうえでも役立つにちがいない。

東北のタケカゴ細工は、おそらく、タケカゴ細工のなかでもっとも北のタケカゴ細工ではなかったか。しかし、そこには幾つかのカゴ細工の流れがいりくみ、やや誇張していえばカゴ細工のほとんどの系列が出会うひとつの大きな工房だったわけである。この工房ではカラタケのカゴ細工というように、流れのちがったカゴ細工が相互に影響しあいながら、両方のカゴ細工に理解をもつカゴ屋さんたちを生みだした。

生産用具、生活用具としてのカゴの形は、そのカゴをつくりだす技術の高さをなかだちにしてカゴの使い途、使い方と結びつく。小文では詳しくはたちいれなかったが、そうしたみかたにたてば、カゴがつかわれた土地土地の生産の移りゆきはカゴの分析に無視できないことになろう。たとえば、青森のカゴは漁業やリンゴ栽培に、久慈山田のカゴその他は山

菜とり、キノコとり、畑仕事、田仕事な どにそれぞれ結びついている。山菜とり やキノコトリに東北のひとたちがどれほ ど愛着をもち、雪国の暮らしにどれほど 大切だったかは強調してもしすぎないほ どである。暮らしのなかに昔から伝えら れてきたカゴ細工は、なにも手ばなしで 存続してきたわけではなく、高度成長の 波がおしよせ、ビニールのような新しい 素材が生活用具を支配するまで、地域の ひとたちの身近かな生活に密着しながら、 その反面近代的な果樹栽培や酪農や園芸 や輸送手段と関係して生きつづけてきた わけである。明治以降のあたらしい生産 の変化にともなって昔からのカゴ細工が どうかわっていったかは、別の地方のカ ゴ細工を考えるときにふれよう。

謝 玹

小文への調査に御協力を給った 青森県立郷土館, 久慈市教育委員会, 山形県高島町中央公民館, 須賀川市立博物館の諸先生, 貴重なお教えをいただいた奈良岡勝造, 大沢初太郎, 鈴木久仁男, 半田勘三郎, 半田かつよ, 半田悦郎, 佐藤信之助, 兼子乕雄, 成田敏, 外崎純一, 生平竹男, 藤森邦夫, 賀美吉之, 高橋治兵衛, 高久田大一郎諸先生, 東京神田写真弘社に心からお礼を申し上げたいと思う。

文 献

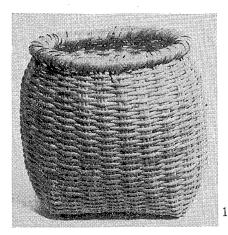
青森県立郷土館, 1975,『青森県の漁具』青森 県立郷土館。

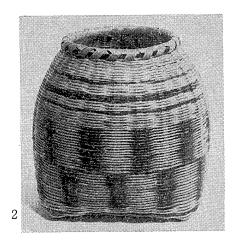
伊東安兵衛, 1965, 『日本の民芸』三彩社。 文部省史料館, 1968, 『史料館所蔵民族資料図 版目録』第2巻, 文部省史料館。

室井綽,1969,『竹・笹の話』北隆館。

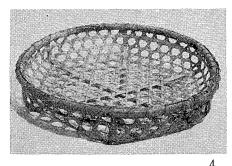
中村俊亀智, 1969,「文部省史料館所蔵生活用 具の研究(一)」『史料館研究紀要』第2号, 文部省史料館。

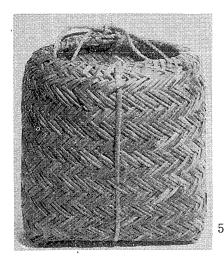
------, 1974,「編み袋の諸形態」『史料館紀 要』第7号, 国文学研究資料館・史料館。 佐藤庄五郎, 1956,『図説竹細工の実際』富民 社。

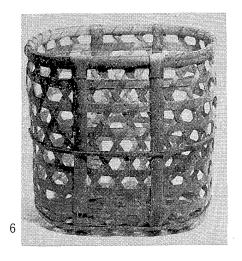










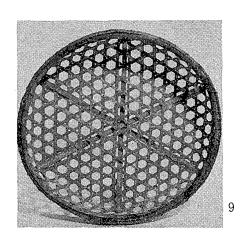


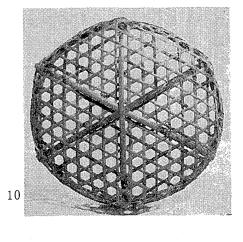
- 1. 久慈市山田のハケゴ
- 3. 岩出山のザル
- 5. 山形県高畠町のハケゴ
- 2. 福島県岩瀬のビク
- 4. 青森市青柳町のザル
- 6. 山形県高畠町のブドーカゴ

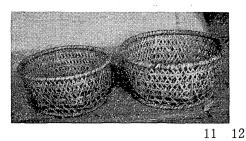
中村 東北地方タケカゴ細工の基調

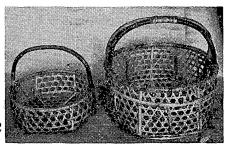






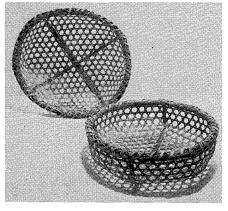


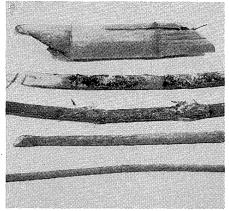




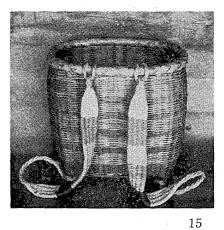
- 7. 久慈市小久慈のハケゴ
- 9. 青森市のザル (表)
- 11. 青森市のチャワンカゴ
- 8. 久慈市小久慈のミザル
- 10. 青森市のザル(裏)
- 12. 青森市のリンゴのテカゴ

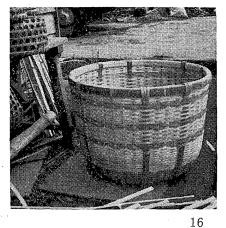
国立民族学博物館研究報告 1巻4号





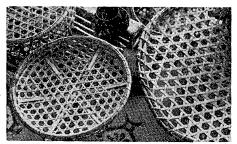
13





,





18

- 13. 岩出山のザル
- 15. 南部型の背負カゴ
- 17. 高畠町のハケゴ類
- 14. マダケ・ネマガリダケ・シノダケ
- 16. 岩出山のクワトリカゴ
- 18. 青森市の漁業用カゴ類

866

中村 東北地方タケカゴ細工の基調



19~24 カゴを編む